ISSN 0911-1530

むつ病誌
Med. J. Mutsu

http://www.hospital-mutsu.or.jp/journal.html

医は仁術なり

医療局長　　葛西　雅治

むつ総合病院に赴任して間もなく 5 年が経過しようとしている。この間に病院は電子カルテの開始、DPC の導入、そして昨年末からは地域包括ケア病棟の運営が始まった。しばらく途絶えていたこの病院誌も、発刊が再開されてから今号で 3 号目を迎えている。むつ総合病院にも「新しい風」が吹いている。

「新しい風」と言えば、病院には毎年研修医やそれに準ずる若い医師が入ってきて毎日研鑽の日々を送っている。自分は医師になりもうすぐ３０年を迎えようとしているのだが、思えば自分にもそんな時期があったわけだ。医師になりたての頃、年配の先輩医師から「名医でなくても良医たれ」とか、「病を診て人を見ざるは、木を見て森を見ざると同じなり」とかいう言葉をよく聞かされた。当時は、なんとなく分かったような分からないような、とにかく朧気にしか理解できていなかったと思う。しかし一端の臨床家を目指した自分には憧れた言葉であった。

医学は科学である。しかし数学や化学、物理学のような理論や計算式で唯一の正解が出せるような他の科学と違い、個体差やその場の環境などで答え（診断や治療法）が幾つも出てくる。医学は数ある科学の中で最も fuzzy（曖昧）である。Fuzzy であるが故に相応の柔軟性が求められる。例えば肺炎のようなありふれた疾患でさえその人の年齢や基礎疾患、併用薬、アレルギーの有無、果ては家庭環境や職場環境、個人の性格などで治療法や治療期間、治療場所は変わってくる。一般論としてはこちらが正解と思ってもあえて違う方を選ばなくてはならない場面もある。悪性疾患や難治性疾患なら尚更考えることは多い。

これからの医学を背負っていく若い医師の方々。病人、或いはその家族が何を求めて今、目の前に座っているのか？それを可能な限り満足させるためには自分は何をしたらいいのか？何ができるのか？診断基準やガイドライン、適正使用法などを覚えた次にはこういうことを考えて医術を行って欲しいと思う。「医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救うを以て志とすべし。わが身の利養を専ら志すべからず。」（貝原益軒）。